

上川【南富良野町】

いわなが

岩永 かずえさん

ふらの農業協同組合 参与、NPO法人南富良野まちづくり観光協会 理事長

1949年生まれ、福井県出身。愛知県名古屋市内の短大卒業後、福井県で編み物教室を開講。1972年に農家である夫と結婚、1974年に南富良野町へ移住し新規就農。JAの活動の中で、男女共同参画を推進している。



様々な分野の人が認め合う男女共同参画を農業で

きっかけ

JAふらの女性部の活動の中で、最初は農業改良普及センターを中心に女性のネットワークを作り、楽しく活動していました。しかし、JAの組織の中に女性役員がないことに以前から疑問を感じていました。2007年にJA上川地区女性協議会会長となって上川管内全体の状況を知り、女性役員の必要性をより強く感じ、JAふらの総代会で女性役員の必要性を訴え始めました。個々の農家では男女共同で経営しているのに、組織の中に女性がないのはおかしいですね。それで、JAの中の男女共同参画を推進しようと取り組み始めました。

苦勞

自分の思いを伝えることが難しく、周囲の方々、特に男性に理解してもらおうのが大変です。「JAに女性役員を」と訴えても、「岩永がやりたがっている」と受け止められました。私はこの地域の農業のために訴えているのに、それをわかってもらえないのは辛かったです。JAふらは、上富良野町、中富良野町、富良野市、南富良野町、占冠村の5行政地区で構成していますが、最初は各市町村の皆さんとの連携を取らずに自分一人の行動で進めたのもまずかったです。地道に訴えて、今はJAふらのの組織として協力を得ることができました。

満足度

男女共同参画とは、様々な分野の人がお互いに認め合い協力することだと考えています。この考えをずっと訴え続けて多くの女性から賛同を得ることができ、JAふらの女性部役員のバックアップを受けて、2015年にJAふらのの参与に就任しました。夫には、「断ったら今までの活動が無駄になるからがんばれ」と背中を押してもらい、息子夫婦も理解があるので本当に感謝しています。それから、以前の総代会で私の発言に対し一人の男性総代の方が、「これからの時代は女性の参画も必要」と言ってくださったことも、本当に嬉しかったですね。

これから

2017年春、JAふらのに女性役員が2名誕生する予定です！現在は私を含めて2名の女性参加があるので、私たちが若い人を支え、女性役員が働きやすい環境を作っていきたいです。私たち女性役員は、JAふらのの組織討議を経て選出されているので、女性の声の代弁者として今後も継続して女性役員を選出したいと考えています。今年の夏の大雨で、南富良野町の農業は甚大な被害を受けましたが、農業者はみんな「もう一度やるぞ!」という気持ちでいるので、女性の細やかな気配りで仲間と力を合わせてがんばっていききたいです。

北の★女性たちへのメッセージ

自分の思いを達成できないと思っても、自信のある「自分のナンバーワン」を見つげると、どんどん広がっていきます。辛さは喜びに変わります。辛い経験があったからこそ喜びをより強く感じられるのです。希望を捨てず、楽しい未来を描ける人になってほしいな。

上川【旭川市】

うえの さゆき
上野 砂由紀さん 上野ファーム ガーデナー

旭川市出身。札幌市内の大卒後、同市内で服飾販売員を経て、ガーデニングを学ぶため英国に留学。2001年から旭川市の実家の農場内で家族と共に庭づくりをスタートし、ガーデンの一般公開を始める。2008年にテレビドラマの舞台となった富良野市内の庭園を設計。現在は夫、子ども2人と暮らす。



花の力でつながった仲間と広げる「北海道ガーデン」

きっかけ

両親が米農家で、個人販売の制度をいち早く取り入れたところ、お米を買うためにお客様が農場を訪れるようになり、農場をもっと魅力的にしたいという思いで、両親が田んぼのあぜ道などに花を植え始めました。私は札幌市内で働いて3年目、「このままでいいのか」と思っていた時に、ずっと憧れていた海外留学の広告を地下鉄で見つけ、母が英国風ガーデンに興味を持っていたこともあり、ガーデニングの技術を身につけたいと考え、英国留学を決意。帰国後に家族総出で造園し、2001年からガーデン公開を始めました。

苦労

英国風ガーデンをつくるため、北海道の気候に合う植物を集めることが大変でした。海外から種を取り寄せ、苗を作っとうまく育つかどうか地道に試して、何度もダメにして…最初の3～4年はもがきましたね。英国風ガーデンを模索して悶々としていた時に、道外のお客様から「北海道の庭は花が大きくて色鮮やかですね」とか、「この時期にバラが咲くなんて」と感想をいただき、ここが北国ならではのガーデンであることに気づかされました。それからは、北国の気候だからこそ表現できる「北海道ガーデン」を意識してつくっています。

満足度

ガーデンを通じて、多くの方とつながったことが一番嬉しいですね。都市と農村の交流の場を作りたいと思って始め、最初は無料開放していたのですが、口コミで広まって来客数が増え、お客様から色々アドバイスをいただいて、今のガーデンができています。まさか観光地になるとは…！こんなに応援してくれる方が多いことに驚くと同時に、花の引力のすごさを感じています。主に私と母が花の手入れをしており、農業とは違い重機を使わずすべて手作業なので大変ですが、ガーデンで楽しそうにしている方を見ると、この場所をつくって良かったなと思います。

これから

富良野市内の「風のガーデン」をきっかけに、「十勝千年の森」の林社長に声をかけていただき、仲間が集まり「北海道ガーデン街道」を立ち上げ、現在は8か所のガーデンを巡る観光ルートに成長しました。道外の方にとって北海道の花といえば「富良野のラベンダー」というイメージも強いですが、様々な植物が育つ「北海道ガーデン」を多くの方に知ってもらいたいです。庭がきっかけとなり十勝方面までつながるなんて想像できなかったのですが（笑）。これからも人とのつながりを大切に、連携して庭の魅力を発信し続けたいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

種は、まかないと芽が出ません。夢を叶えるために、まずは夢の種をまいてみましょう。種をまいても芽がでないことや途中で枯れることだってもちろんありますが、めげないで！種をまき続けて、出た芽を大切に育てていけば、いつか綺麗な花が咲くはずですよ。

上川【剣淵町】

おざわ ゆうこ
小澤 祐子さん 株式会社ビバカンパニー 代表取締役

1955年生まれ、旭川市出身。駒沢女子短大（苫小牧市、現在は東京都に統合）卒業後、北海道録画センター（旭川市）勤務中に社長から「ビバ アルパカ牧場」の代表に抜てきされ、兼務することに。主に週末はアルパカ牧場で勤務。旭川市在住。



思いを共有できる仲間と一緒に働ける幸せ

きっかけ

北海道録画センターの井下社長が、故郷の剣淵町でスキー場跡地を利用したまちづくりに協力しており、北海道で初めてアルパカを飼育することになって、社内で一番古株だった私が運営を任されました。試験飼育していたアルパカの出産、さらに那須ビッグファーム（栃木県）からアルパカを購入し、2009年に「ビバ アルパカ牧場」を開設しました。アルパカの飼育は担当スタッフに任せ、私はイベントの企画、実施、PR活動、牧場全体の運営統括をしています。なので、私がアルパカが大好きで始めた牧場じゃないんですよ（笑）。

苦勞

自然相手の仕事は厳しいものです。一番大変なのは草刈りと除雪なのですが、私はそれらを手伝えないので、戦力にならない存在だということが心苦しいです。牧場の仕事で、私ができることって少ないんですよ。草花は好きなのですが、実は動物は苦手です…。私ができることは、観光の目玉が尽きないように色々考えることです。資金が少ないので、ほとんど手作り。朝のお茶会がスタッフミーティングの場になっていて、スタッフからも企画を提案してもらっています。それを魅力的にPRして、集客につなげていきたいです。

満足度

週末はアルパカ牧場に来て、朝早くから自然豊かな牧場内で過ごし、体を動かして心地よい汗をかき、夕暮れと共に仕事を終えるのですが、この時間の過ごし方がとても贅沢だと感じています。平日のデスクワークは、昼夜関係なく夜中まで働くこともあるので、週末の牧場ですごくリフレッシュさせてもらっています。スタッフも本当に素晴らしくて、思いを共有できる仲間と同じ方々を向いて牧場を運営できて、幸せです。ここ1~2年では、地元の方々も多く来てくれるようになり、楽しんでもらっているようで嬉しいです。

これから

アルパカ牧場は、冬をメインにやっています。冬は外国人のお客様が多いので、牧場内を国際化していきたいですね。また、地元の方々にも外国人を受け入れるよう取り組んでもらって、将来的には町全体の国際化につながればいいなと思っています。牧場では、アルパカがきっかけで姉妹都市となったペルー共和国タルマ市でも食べられているスーパーフード「キヌア」の栽培・試食を実施しています。新たに山頂に「大人の秘密基地」を作ったので、牧場のテーマカラー「ピンク」と「ハート型」に合わせて、ここで結婚式などを企画してみたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

一人で無理してがんばらずに、誰と一緒にやればいいのかを考え、一緒に達成できた時の感動を味わってください。自分から寄り添う気持ちで、肩の力を抜いていきましょう。そして目標を持つと、ぐっと視野が広がります。

上川【中富良野町】

くぐり さだこ
九栗 貞子さん 農業者、北海道女性農業者倶楽部（マンマのネットワーク）

1949年生まれ、中富良野町出身。農業を営む夫と結婚し農業者の道へ。1999年、北海道指導農業士認定、2002年、地元農産物を使用した「北のカレー工房・きらら」開店、2007年、北海道女性農業者倶楽部（マンマのネットワーク）設立、代表に就任。



次世代へ引き継ぎます、「女性農業者は経営者である。」

きっかけ

指導農業士となったのは、農業改良普及センター職員の「女性指導農業士の草分けになって欲しい。」との言葉、そして迷いがあった私に夫から「自分のできることをやればいい。」の一言。もっとも、これがきっかけ…と言いつつ、以前から私は心の中で、「何かをつくりあげること。」の意義、農業現場だけでは無く様々な組織等とつながりをつくりたい、との思いを秘めていたように感じます。中富良野町のラベンダー人気に火がつく少し前、ドライフラワー製作を始めました。農作業や家事等を終えた夜10時過ぎ、集めた小さな花々を一つの形に仕上げていくことを無心でやっていました。

苦勞

昔、家族経営の農家のお嫁さんが自分名義の通帳をつくるのが難しかった時代がありました。我が家では、みんなで話し合い就業環境等を取り決める家族間協定を結んでいます。自立した女性が農業者の一員となっている今、指導農業士の私の役割の一つは、過去の農村地域の確執の打破。一方で、若い女性達の、例えば「介護」という現実の中で揺れる心や立ち位置を理解できます。私も義母を自宅で21年間介護しました。経験を踏まえての過去、被介護者の立場も理解できる現在、それらを礎に、将来の担い手達へ向き合っていこうと思っております。

満足度

平成11年に指導農業士となり、平成14年、地元の米や野菜等の本来の美味しさをお届けしたいと「北のカレー工房・きらら」を開店、平成19年には女性農業者と非農家のマンマたちをつなぐ「北海道女性農業者倶楽部（マンマのネットワーク）」設立…多くの方とつながり・支え合い、ここまできたと感謝しております。食の情報発信と、旬の素材を旬の時期に召し上がっていただくとともに、率直な評価をうかがいたい！との思いから「カレー工房」を開店しました。とはいえ、根っからの農業者なので、お客様からの「美味しい。」という言葉と笑顔が、何よりも嬉しく感じます。

これから

人々が集まる・学ぶ、場がマンマ。講師を招聘しセミナー等も行っていきます。が、学びがゴールではなく、それを力に成果を出すことが大切です。また、マンマでは徹底的に議論しますが、次につながる意見であることが共通認識。成果を出す、意見を出す、地元フィードバックしその地域にしかできない特徴を出す、全ては次の世代へ繋げていくための方向性です。農業者の妻は指示されたことのみ行うのではなく、経営への共同参画が求められています。性別を問わず、経営の一端を担い、地域活動へも関わっていくことが大切。それを踏まえ次代の担い手を育てていきたいと願っております。

北の★女性たちへの
メッセージ

地に足をつけ、しっかりと基盤のできた女性であってください。思いを形にするには、自分が定めた軸足できちんと立つことが大切。周囲の環境や状況など変えることができないものがあったとしても、ぶれずに自分の方向性を見据えていけば、思いは形になります。

上川【東神楽町】

みわ よしこ
三輪 美子さん ステンドグラス作家

旭川市出身。北海道東海大学芸術工学部デザイン学科（旭川市、現在は札幌市に統合）の卒業制作でステンドグラスを選択し、魅了されて作家になることを決意。東京都内の工房で経験を積み、1985年に独立。1990年に兄と合同でデザイン会社を設立後、2000年に単身で工房「GOLD.WINGS」を設立。



ガラスに思いを込めて、300年後の未来につながるメッセージ

きっかけ

ステンドグラスを初めて見たのは、子どもの頃、旭川市内のカトリック教会でした。その時は、キリスト教の世界観が少し怖いと感じましたがとても印象に残っていて、大学の卒業制作ではステンドグラスを選びました。夏休みに東京都内の工房で実習し、初めてステンドグラスを制作したのですが、楽しくて大好きになりました。自分の頭の中のイメージ、目に見えない想像の世界を表現するために、ステンドグラス作家を志したのはこの時です。卒業後は、同じ東京都内の工房に就職し、その後は兄がやりはじめたデザイン会社と一緒に仕事をしていたのですが、今は独立し私一人の工房で、主に個人の方からご依頼を受けて、住宅用のステンドグラスを作っています。

苦勞

ご依頼主のご希望と、自分が表現したいものを合わせて作品にするために、打ち合わせを何度も重ねます。ステンドグラスは、修復を加えつつ300年は持つと言われている芸術品ですので、強い思いを込めて表現したい。そのために技法を工夫し新たな技術も取り入れながら作っています。世の中に訴えるものや時代に対するメッセージがないと、芸術ではないと思っています。必死に考えたデザインを、ご依頼主からは「芸術的すぎる」と言われることもあります（笑）。

満足度

私の作品を見て、「元気になった」「前向きな気持ちになれた」と言ってもらえることが、何よりも嬉しいです。受け取る方の気持ちに寄り添い、私も一緒に前に進んでいけるような作品を作りたいと思っていますので、ご依頼主と一緒に思いを発信し、そしてご依頼主が喜んでくださっていることが一番です。旭川市内の大学で講師をした時、学生にはステンドグラス制作の経験を実績として、自信につなげてデザインの世界で生きてほしいという願いを持ちつつ教えました。

これから

日本には、伝統的な日本らしいステンドグラスがあります。私は、日本の伝統を守りながらそこに新たな技法も取り入れ、これからの300年に向けてプラスのメッセージがあるステンドグラスを、ご依頼主と一緒に作っていかれたらと思っています。歴史的建造物の中には、日本古来のステンドグラスが多く使われていて、それらを保存する活動のお手伝いもし始めました。古いステンドグラスの保存や修復も、次の世代に伝承していきたいですね。

北の★女性たちへの
メッセージ

女性としてやっていくことは戦いでもありますが、自信を持って進めば大丈夫。忙しくて余裕がなく大変な方もいると思いますが、少しだけ周囲にアンテナを張って一歩前に踏み出すと、今まで想像もつかなかった世界が広がります。年齢は関係ありません！

上川【鷹栖町】

むらかみ きょうこ
村上 京子さん ムーンライトレディース 代表

1962年生まれ、東京都出身。九州産業大学(福岡県)卒業後、旭川市内の家具メーカーに就職。退職後2級建築士の資格を取得し、地元工務店を経て数年後に独立。仕事で出会ったカナダ人のダニエル氏と結婚後、1995年に鷹栖町へ。2004年から犬ぞり体験の提供を始め、年平均約400人程度の来客数で定着。



愛する犬たちと心の底からの感動を

きっかけ

知り合いからハスキー犬の子犬を引き取ったことが始まりでした。友人から「ハスキー犬がいるなら一緒に犬ぞりを習わせに行こう」と誘われ、知人の犬ぞり経験者の所で初めて犬ぞりを体験。うまく操れず転倒ばかりだったけれど、衝撃的に楽しく「これをずっとやっていきたい!」と思いました。その後、アラスカンハスキー犬3頭を譲り受け、全てメスだったので、夫がチーム名を「ムーンライトレディース」と名付けました。現在は、その当時の犬たちの子供達も一緒に、家族チームで体験を提供しています。

苦勞

雪に閉ざされる冬を楽しく暮らす為の私と夫の共通の趣味として始めましたが、やがてその楽しさを伝えたいという思いから犬ぞり体験を始めました。定着するなど全く思いもしませんでした。年数を重ねお陰様で多くの人に予約を頂けるようになりました。今は、私も夫も犬達も体力と健康を維持していく事が欠かせません。365日犬達と向き合い犬達の個性、年齢、能力など様々なことに配慮してチームを作るのが私の役目ですが、美しい雪の中、命輝く皆とソリを走らせる時や、喜んでくださるお客さんの存在など、続けていこうと思わせる魅力が、犬ぞりにはあると思います。

満足度

これまでの海外のお客様の口コミが影響して、お客様の大半が外国からのお客様になっています。暖かい国の方々が、おそらく人生で一度きりになるかもしれない、実際見たこともない犬ぞりを体験する為に遠路はるばる来てくださって、心の底からの感動を味わってくださることは驚きでもあり、一番のやりがいでもあります。また、犬たちの成長を見ることも喜びの一つです。人より短い命の中で、一生懸命練習してソリ犬になって、彼らが生き生きと輝き愛される喜びを感じていることは、私にとって自己満足ではありませんが、幸せで価値のあることだと思っています。

これから

私達は、現在のような犬ぞり体験を事業として将来を展望できるような状況からスタートしたわけではありません。ようやくその可能性を感じる今は、この提供規模を自らが維持できる時間が短いというのが現実です。犬ぞりは環境に依存する側面が大きくその意味で立地の選択肢が限られます。また平均10歳で引退し15年の寿命である犬達の引退後の暮らしと幸せに責任があります。そのバランスをとりながら無理なく存続していける規模を模索しています。またこれまで小さく続けてきた生産活動や、冬のクエストをそれ以外の季節に結びつける工夫など、工夫できる未来はまだあるなあという思いです。

北の★女性たちへの
メッセージ

華々しく成功してカッコイイ人ただけに価値があるわけではありません。たとえ目立たなくても、その人らしくやってきた時間に価値があるのです。女性は、豊かな感性で価値を生み出せます。自分の魂を喜ばせて、価値のある人生を積み重ねていきましょう。

留萌【増毛町】

井村 裕子さん 國稀酒造株式会社 企画室

1955年生まれ、増毛町出身。留萌高校卒業後、小樽市で観光会社の販売員等を経験し接客業を習得。2007年、母との同居のため郷里に戻り國稀酒造と出会う。きめ細やかな施設ガイドが観光客に人気。2015年、國稀酒造の創業者と関係の深い小樽市の「観光大学」案内人マイスターを取得。



雰囲気ひとつに「お客さまが主役」のご案内を心がけて

きっかけ

学生時代から、歴史文学の本を読むことが大好きで、その趣味が高じて、國稀酒造のルーツや周辺の情報、他地域との関連性を調べることに熱中するようになりました。國稀酒造に勤めることになったのは全くの偶然です。このような歴史的な建造物などに触れ、「せつかくなら」と、徹底的に調べてみました。これがガイドにもとても役に立ち、地域のお客さまには、より良く地元を見直してもらえ、他地域の方には、増毛町との関係性など知って喜んでもらえ、ますます興味がわき、継続してきました。今では、國稀酒造との出会いも天命かと思っています。

苦勞

元来、人前に出ることが苦手で、ガイドの役割に慣れることから始まり、案内をしてみると、時間配分、音量、間に気を使います。また、通り一辺倒で独りよがりの説明では、お客さまの気持ちは掴めませんでした。お客さまは、こちらに知識があるという前提で質問してこられますし、出身地などのお人柄の下調べが出来ない予約外の方や専門分野の方もいます。興味をもって頂きたいので、私自身の探究心もありますが、どんな方にも笑顔で案内に参加してもらえよう、様々な土地や職業など情報収集し、話題に出来るようにしています。

満足度

私が案内した全国各地のお客さまから、御礼のお手紙や写真が届きます。また、私を指名してくださるツアーのお客さまやリピーターの方も増えてきています。自分が目標にしている「お客さまを巻き込んだ、お客さまが主役」の案内が、受け入れられて喜んで頂けていることを、とても感じるようになりました。外国のお客さまであっても、言葉は通じなくともユーモアは通じます。障がいのある方も、お年寄りも、個性に合わせての案内を心がけることで、「楽しかった」の嬉しいお言葉を頂くことが出来ています。

これから

案内がマンネリにならないよう自戒しつつ、増えてきている外国のお客さまへの対応力をさらに高めようと、英語の勉強もしています。ボディランゲージを併せ、自分の言葉と気持ちを込めてコミュニケーションが出来れば、もっと楽しんで頂けると思います。また、これからの観光産業発展のためには、増毛という一地域に止まることなく、オール北海道、オール日本体制が必要な時代に入っていると思います。私自身、全国各地に仲間が居て色々な情報共有を図っていますので、そのようなネットワークを通じて気運を高めていきたいですね。

北の★女性たちへの メッセージ

家事は年中無休ですが、目の前の仕事に追われると本当にしたい事が後回しになります。とかく女性は完璧を求めがちですが、「逃げられないこと」と、とらわれず、優先順位をつけて、家事の断捨離をしてみてください。手抜きもシェアする勇気も必要ですね。

留萌【羽幌町】

えびな ももこ
 蝦名 桃子さん 有限会社蝦名漁業部（甘えび専門店海の人） 専務取締役

1976年生まれ、羽幌町出身。高校を卒業後、札幌市で就職。地元に戻り、エビかご漁師である夫と2002年に結婚。2013年から蝦名家の漁師飯である「酒蒸し甘えび」を加工販売し、「平成26年度北のハイグレード食品+（プラス）」に選定される。家族は夫と息子が3人（中1、小5、小2）。



甘えびの価値を上げて、浜に活気を取り戻す

きっかけ

初めて行った朝の市場に、この町にもこんなに活気がある場所があるんだと感動しました。しかし、漁業は、自分たちで値段を付けることができない世界、燃料や資材が高騰しているのにエビの値段は変わらない、このままでは、漁師の生計が成り立たなくなるし、若い漁師たちも夢がもてなくなる。そこで、甘えびを加工して、その味を全国に届け、甘えびのおいしさを知ってもらうことで、甘えび自体の価値が上がれば、エビ漁師をしている人みんなが喜ぶと思いました。また、加工の仕事は、子育て中でも都合に合わせた勤務ができるので、漁師の奥さんの雇用の場にもなると思いました。

苦勞

食品加工をすることは初めてのことだったので、施設の検査などわからないことだらけでした。また、加工をやることで漁の手伝いができなくなることに悩みましたが、夫が背中を押してくれました。地元の人の中には、「生の新鮮なエビが食べられる町で、加工したエビなんて売れないよ。」という人もいました。作った商品が売れないことには、新たに商品を作れないし、設備投資などにお金もかかるので、本業である漁業に影響が出ないようにいろいろな商談会に参加して、販路を広げるための努力をしています。

満足度

「酒蒸し甘えび」がレストランのコース料理やおせち料理にも利用されるようになりました。禁漁期間に漁師達を連れてイベントで、実際に売ってもらうと、最初のうちは黙って見ているだけでしたが、実際に消費者のみなさんに「おいしい。」と食べてもらえる現場をみることで、自分たちがとったものを認めてもらえたうれしさを感じたようです。これまで、市場に出して終わりだったものが、何のために自分はエビを捕っているのかということがわかることで、若い漁師達が漁業に楽しみをもって沖に向かうようになったと思います。今では自分達からイベントに参加したいというようになりました。

これから

まだまだ始めたばかりで試行錯誤しています。いろいろと新しい商品の開発も行っていますが、これからもエビの魅力が詰まった、エビの魅力を消さない商品づくりをしていきたいです。そして漁師でもやればできるというところを見せたいし、そうなりたいと思います。将来的な目標は空港で販売されて、それが飛行機の機内食に使用されたりしたらいいなと思います。いつか夢は叶うと思っています。これからも日本一の甘えびを宣伝していきたいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

あきらめなければ絶対にできるし、無理だと思っていたことも無理じゃなくなる。一生懸命やって一生懸命人に伝える。正直にまっすぐ自分を出すことで、味方になってくれる人も増えると思います。

留萌【遠別町】

たつぎき ゆき
立崎 由樹さん Comedokoro-コメドコロ 店長

1993年生まれ、小樽市出身。高校2年生の時、当時交際していた大学生の就職先が遠別町に決まり、試しに遠別町を訪れた際に町民の温かい人柄にふれ、結婚を決意し遠別町に移住。就職しながら通信制で高校を卒業、2012年に結婚。2015年4月に「コメドコロ」をオープン。



人の輪が広がり、また行きたくなる地元密着カフェ

きっかけ

私が遠別町に移住したのは、この土地の人柄に惚れたからです。初めて来た時から皆さんとても親切にしてくださり、大好きになりました。移住後すぐに仲間ができ、みんなで集まっていた時に「えんべつB級グルメコンテストに出場しよう」という話になり、料理が得意な私がメニューを考えることになりました。出場した結果、「えんべつロール」が2012年の準グランプリになりました！周囲からは「このまま終わるのはもったいない」という声があり、NPO えんべつ地域おこし協力隊の方から「道の駅の店舗を借りたので、ここで何かやってみて」と頼まれ、「コメドコロ」をオープンしました。

苦勞

道の駅の店舗は、以前は飲食店をやっていたけど辞めてしまって、直近では喫煙室として使われていたものでした。まずは掃除がとても大変で、汚れや臭いがどうしたら取れるのか試行錯誤しながら取り組みました。改装も、資金がないから自分でやろうと思ひ、町の大工さんに方法を教えてもらったり、皆さんに手伝ってもらって進めました。店は、小さい子どもにも来てもらいたいと思っていたので、どうしても小上がり席が欲しくて自分たちで作りました。皆さんのおかげで、なんとかオープンまでに完成できました。

満足度

お客様には、お店でくつろいでもらいたいし、一期一会の出会いでも記憶に残る店になってほしいと思って、必ず会話をするような心がけています。1年目は、道の駅という場所のため観光客の方が多く来られ、旅行の後にお手紙をくださる方もいて、思い出に残る店になれたことが嬉しかったです。2年目は、地元の方が多く来られて、お客様同士が友人になるなど町内では少なかった交流の場になっているので、良かったなと思っています。子どもたちもたくさん来てくれて、休日には「コメドコロに行きたい！」と言ってくれる子もいるようで、とても嬉しいです！

これから

「コメドコロ」は、遠別町産のものを使うことをコンセプトにしています。米粉は、遠別農業高校で育てたもち米を町内の業者さんに粉にしてもらっています。野菜は、オロロン農協女性部の「花菜夢(かなむ)」さんから主に仕入れています。最近では他の農家さんや町内の方々が「これ使って！」と食材を提供してくださることも多く、こうやって人の輪がどんどん広がっていく店にしていきたいですね。あと、夏休みに「子ども店長」という企画をやって大好評だったので、子どもたちと一緒に料理教室や親子体験教室などをやりたいです。

北の★女性たちへの
メッセージ

チャンスがあったらまずやってみてください。好きなことなら続けて、嫌いなことでも続けてみたら好きになるかもしれません。どんなことでも自分の経験になります。やる前に諦めないで取り組んでみたら、ちゃんと見ている人がいて次のチャンスがやって来ますよ。

宗谷【枝幸町】

しょうじ かがり
小路 香里さん トリニティスノーボードスクール J S B A 公認 C 級インストラクター

1972年生まれ、留萌市出身。札幌市内で20歳からスノーボードを始め、23歳でプロに。1998年長野冬季五輪のスノーボード・ハーフパイプの日本代表選手となる。2005年に結婚し2009年に枝幸町へ。地域総合型スポーツクラブ「枝幸三笠山スポーツクラブ(EMSC=エムスク)」設立時の理事。



大好きなスノーボードの楽しさを地元で教える

きっかけ

札幌市内でアルバイトをしながら自分のやりたいことを模索していた時、テレビでスノーボードのハーフパイプを見て「やってみたい!」と思い、スノーボードを始めました。選手時代は、国内外で転戦し、長野五輪にも出場できて充実していましたね。結婚後、夫の仕事の都合で枝幸町に移住し子育てに専念していましたが、住民が自主運営するエムスクの存在を知りました。地域のスポーツ振興という理念に賛同し、私にも何かお手伝いできればと思い、立ち上げの1年後に理事になりました。今は理事を退任し、スノーボードスクールのインストラクターとしてエムスクに協力しています。

苦労

エムスクの立ち上げ時には、会員がなかなか集まりませんでした。地元の方々は、新しく始まったクラブの様子を少し見ている、といった感じでした。最初は、外部講師を呼んでエアロビクスなどを実施していましたが、町の皆さんは興味がありながらも消極的だったんです。でも少しずつ会員が増えて、町営体育館等スポーツ施設の指定管理を受けてからは、サッカー場、野球場、スキー場等様々な施設の運営を任せられ、外部講師だけでなく職員自らが指導できるようになり、町のスポーツを充実させることができました。

満足度

小学生を対象にスノーボードを教えることが多いのですが、子どもたちにスノーボードを教えられることに喜びを感じています。プロ時代に人に教える機会があり、その時には「ちゃんと教えなきゃ」という思いが強くてうまくいかず自分は講師に向いていないと思っていたのですが、「教える時はほんのちょっとのアドバイスで良い!」ということに気づくことができ、やっぱりスノーボードという特技を活かしたいと思って、インストラクターの資格を取りました。子どもたちが上達して、寒さを忘れてワイワイ楽しそうにスノーボードをやっている姿を見ると、本当に嬉しいです。

これから

今は、介護士として施設でパートの仕事を主に行っており、スノーボードスクールのインストラクターは、自分の時間が空いている時や、エムスク等で講師が少ない時に協力しているかたちです。これからも気負わず、できる時に教えるという今のかたちを続けていきたいですね。スノーボードが大好きなので、たくさんの方々に楽しさを知ってもらいたいし、エムスクにもできる限り協力していきたいです。自分としては、選手時代によく行っていたニュージーランドやカナダで、いつかまた滑ってみたいです。夢ですね(笑)!

北の★女性たちへの
メッセージ

自分が何をしたいのかわからない時もあると思いますが、やりたいと思ったことはやってみた方が良いです。自分に素直になってみると、やりたいと思うことがきっと現れます。やりたいことが見つかったら、多少困難なことがあっても頑張れます。